

明治期日本の南洋群島進出と日本人移民の推進者と先駆者 — 横尾東作と森小弁 —

丹野 勲

はじめに

日本が南洋群島に関心を示し、貿易を行い殖民にも関心を示したのは、明治初め頃からである。小笠原に水谷信六という人がいて、当時小笠原には南洋群島の原住民が帰化した者がおり、その帰化人から南洋群島の話聞き、南洋群島遠征の冒険を思い立った。1886（明治20）年、水谷はわずか45噸の帆船「相陽丸」で、南洋群島のポナペ島に航海した。ポナペ島は当時スペインの植民地であり、水谷はポナペ島に到着後許可を受けていないとしてスペイン当局より帰航を命じられた。水谷は、帰路、南洋群島のビンブラック島やキモール島に寄って密貿易を行い、小笠原に帰った。これが、日本人が南洋群島との貿易を行った最初であるといわれている⁽¹⁾。水谷信六は、後の1891（明治24）年、「快通社」という貿易会社を設立し日本と南洋との貿易事業を行った。快通社は、帆船「快通丸」を就航させ、1892（明治25）年にはトラックに支店を設けた⁽²⁾。

明治の初期には、日本の南洋群島への関心の高まりなどがあり、この快通社をはじめとして南洋貿易の会社が相次いで設立された。横尾東作が設立した「恒信社」、田口卯吉が設立した「南島商会」が代表的な南洋貿易商社である。

本稿では、横尾東作の恒信社を中心として、田口卯吉の南島商会にも触れて、明治時代の日本の南洋群島進出に関して、横尾東作という人物を通して考えていくこととする。

さらに、1891（明治24）年と最も早い時期に南洋群島のトラック諸島に渡り、

日本人の南洋群島移民の先駆者として活躍した森小弁を取り上げる。森小弁は、一人の南洋移民として生涯を終え、現地社会に大きな足跡を残した、まさに奇才であった。

1. 横尾東作—南洋貿易会社「恒信社」の設立者

横尾東作は、明治初期の日本の南洋群島進出に貢献し、南洋貿易会社「恒信社」の設立者としても著名な人物である。横尾東作についての研究は極めて少なく、戦前期の研究として、1917（大正6）年に河東田経清により編纂刊行された『横尾東作翁傳』が代表的なものであり、また、竹下源之介（1943）『横尾東作と南方先覚志士（南洋資料258号）』南洋経済研究所も貴重な史料である⁽³⁾。

横尾東作は明治17、18年代よりフィリピン南部諸島や南洋諸島への進出を目指し、1885（明治18）年に「南洋公会設立大意」を著した。1887（明治20）年に硫黄島探検を行って、硫黄島の日本領有に先鞭をつけた。1890（明治23）年に南洋貿易を行う最も古い商社として恒信社を設立し、南洋群島での貿易を主とした事業を長きにわたって行った、横尾東作は、日本の南洋進出推進の先覚者たる存在である。明治初期の代表的な南洋群島進出の推進者、先駆者である横尾東作という人物を通して、当時の日本の南洋群島進出についてみていくことにする。

（1）横尾東作の経歴と榎本武揚の南進策

横尾東作は、1839（天保10）年2月18日、陸中下新田村（今の宮城県鳴瀬村）に生まれた。父は、この地で医を業としていた。16歳の時に、仙台藩の新井義右衛門のもとで漢籍を修め、さらに23歳で江戸に出て昌平坂学問所で林大学頭に学んだ。さらに、仙台藩から選抜されて、横浜の米人宣教師ジェームス・ブラオンのもとで英学を学んだ。1868（明治元）年、仙台藩に招かれて英学教授となった。

1871（明治4）年、横尾東作は、友人の山東直砥、岡本監輔らと共に早稲田に北門社（後の東京専門学校、早大の前身）を起して英学を教授した。1872（明治5）年仙台藩知事伊達宗敦は英学校として辛未館を創設し、その英学教

授として横尾を招聘した。しかし同校が廃止となると、1873（明治6）年横尾は神奈川県庁に勤め、主として教育に従事し、脩文館校長も兼ね英語を講じた。1876（明治9）年に警視庁に転じ、外国掛、記録課長などを歴任した。1886（明治19）年に48歳で警視庁を辞職し、その後南洋事業に没頭することとなった。

横尾東作が南洋に関心を持ったのは、英語に秀でて欧米書にも親しみ海外の情勢に明るかったことがある。横尾は、1868（明治元）年より1877（明治10）年にかけて「訓蒙天交図解」、「景象論（五巻）」、「童蒙教育問答（三巻）」などの翻訳を行い、これを出版している。さらに、横尾が南洋群島に目をつけた直接の動機は、1876（明治9）年榎本武揚がマリアナ群島買収を画策したことであった⁽⁴⁾。

すなわち、1876（明治9）年、駐ロシア公使であった榎本武揚は、モスクワでの各国公使との会合の際、スペイン公使から日本に近接しているスペイン領マリアナ群島を譲渡する意向があるとの情報に得た。それで、榎本は、直ちにその旨を駐英公使の上野景範に私信して、上野にその兼任国たるスペイン、ポルトガル両国に、このマリアナ群島に関するスペイン政府の内意を探らせる一方、日本政府にマリアナ群島の買収を建言した。上野はスペイン外相ラルランテスと会見し、個人の資格でこの問題を持ち出したところ、外相はマリアナ群島が極めて環境は悪く、統治に難があり、将来経費を使って統治する利益はないと考えているので、マリアナ群島の買収の協議に応じる意向を示した。上野は直ちにこの結果を榎本および外務卿の寺島宗則に申し送った。このような経緯で、榎本の建言にもとづき、日本政府はマリアナ群島の買収問題を議したのであったが、当時日本では西南戦争の起る前で国内も動揺し、かつ小笠原の日本帰属を列国に通告した時期で、南洋群島の経営など未だ手がつけられないという状況であった。榎本のマリアナ群島買収策はそのまま保留となってしまった。

しかしながら、この問題が有志の間に伝えられ、榎本の海外開拓の意思に相応じて南洋に進出しようとする者が次々となるようになった。このような南洋進出を志す者の代表的一人が、横尾東作であった。

（2）南洋公会と南洋公会設立大意

横尾東作は、1885（明治18）年12月に「南洋公会設立大意」を起草し、翌

年これを各方面に配り同志の獲得を図った。この南洋公会設立大意は、1886(明治19)年に発表されたもので、日本の南進思想の文献で最も古いものである。その構想は壮大で、当時としては先進的であった。

横尾の南洋公会設立大意は二篇あり、和紙で書かれたもので、前篇は約1,700字の短文、後篇は約4,800字の長文であった。その内容は、南洋群島での貿易を開き、日本人の殖民を奨励したものである。その構想は壮大で、当時としては先進的であった。

南洋公会設立大意の前篇の内容は以下である⁽⁵⁾。

「基固からざれば傾き易く根深からざれば抜け易し事物皆然り、故に田野広からず収穫多からざれば豪農を生ずること能はず。(中略)

彼西南群島の地は、其麗億のみならず氣候温和果実充盈し、其地を収めて国力を養ふるに足り、我臣を移して、飢寒を濟(すく)うるに足れり、官報第六百十二号にゲルマン皇帝は東經一百四十一度より一百五十四度に至り亦赤道より南緯八度に至れる間にして他国に属する群島を除き余を尽くドイツ殖民会社に賜ひて保護令を下せり、夫(それ)ドイツは北緯五十度以北東經六度以東に位す其群島と航路の遠近寒暑の差異我の東經一百四十度北緯三四十度に位す者と孰(いず)れか難く孰(いず)れか易きや智者を待て後に知らざるなり、嗚呼一国独立は其国陸海の兵備に在ること勿論なりと雖ども、亦(また)其民の検を冒し危を凌ぐの希少に基づけり、今我群島中に生息して因循拱手(きょうしゅ)し他の爲す所に任せ幕燕釜魚の暫樂を貧らば異日累卵の危き臍(せい)を噬(か)むとも及ぶことなけん、於是同志相詢(あひはか)り大に群島の形勢を按じ、速に南洋公会を設立して海内の氣象を振起し南洋を観ること、恰(あたか)も盆池の如く舳艫(へろ)に属し、外人の已(い)に経略したるは、貿易を開きて有無を通じ、其未だ経略せざるは恩威(おんい)を以て其民を懐(なつ)け、但(ただし)剽悍(ひょうかん)にして化す可らざるに至り始めて、鉄鉞を用ひ旧染汚俗を一新し大に天下の大局を一変せんとす。(中略)

古人曰く、精神一到何事か成らざらん斃而後已むとは士君子の分なり敢て同胞愛国の諸君に告ぐ幸に猛省する所あらんことを。」

以上のように、横尾は、西南群島の地は氣候温和で果実が豊富で、その地を収めれば日本の国力を養うに足りる。その目的のため、冒険して、南洋公会を

同志と共に設立して、貿易を行い、日本人を殖民したい、と述べている。

横尾の南洋公会設立大意の後篇では、以下のように記されている。

「速に政府の保護を仰ぎ有志の賛成を得て南洋公会を設立し殖民に従事せんとす、若し袖手歳月を虚（むなし）ふせば犯罪は天下に充滿し、殖民地は尽く外人の手に墜ちん、因（よつ）て殖民すべき南洋諸島図並びに其島地の形況を抄訳して一覽に供す幸に大方の智力を合することを得ば、東京に会議を開き着手の方法を議せることを懇望に堪へざるなり。

(中略)

我輩ひそかに着手の順序殖民の手續を按づるに、先づ探討船2隻を出しパラワン島スルー島ミンダナオ島に航し、直ちに其土地の景況を熟察し、酋長と和親を結び、島民と懇懃（いんぎん）を通じて暫く約を立て、地を借り貧民の生計に迫り、外国に出稼せんとする者破廉恥の職業を禁ぜられて活計に苦しむ者社会の擯斥（ひんそ）を受けて自棄自暴を逞ふする如き者は勿論、一切刑人を移住せしむるの目的なれば、先ず妻子ある者を先きにし、日常生活の物品より各職業に必要な器具及一歳の糧を給し、且（かつ）常食の穀物にして彼土に生ぜるものあるをば其種子苗木等を輿へ耕転せしめて給糧將に尽きんとする頃より其土地に生じた新穀を食はしめ、塩は海水を晒して日用に供せしめんとす。

(中略)

公会は此三島中各重要な地に役所を置き役員を派して、土地を割渡し職業に従事することを指揮し、時々地方を巡回して百般の取締を爲すべし是を殖民の第一区とす。

第一区の事務略々緒に着けば、斜めに東折して、カロリン群島マーシャル群島に殖民すべし、スペイン領ラドロン群島（マリアナ）は若干金にて譲与する説あり、実地の調査により利益あれば譲受けて同時に着手せんことを要す、是を殖民の第二区とす。

小笠原諸島の東南にマゼラン群島アンソング群島ありて棋布星列し直ちにハワイ群島に毘連す此群島の現にハワイ政府に属する者は僅々十三島あるのみ、其余は尽く無主の島嶼なると聞けり、探討を尽くし果して殖民すべき地あらば囊に出稼して、ハワイ島民の雇夫たる者に諭し王土に復して自主民たらしめ漸く自余の人民を移すべし。

右三区殖民の事業大に挙り、物産浸く興るに至らば、小笠原諸島は二区三区に入るの門となり朝夕船舶の便を得て自然一大市場となるべきは、猶沖繩の八重山宮古諸島が第一区に入るの門となるが如し、此時公会は商売を誘導して我殖民に物産を開き他国殖民と交易を通ぜしめて漸次計画の整ふるに従って、悉く政府に献じ更に南緯諸島に殖民地を求むことを怠らざるべし。

(中略)

公会は最初に総五万円の資本と定め、内二万円を南洋探討船往復六箇月の費用に充て、残三万円を以て諸般の準備を爲さんとする。」

以上のような南洋公会設立大意の後篇では、要約すると、横尾は南洋公会の具体的な内容について次のように述べている。

政府の保護を仰ぎ有志の賛成を得て、南洋公会を設立し、殖民に従事する。もしその設立が遅れると、日本の犯罪は充満し、殖民地はことごとく外人の手に墜ちてしまう。殖民すべき南洋諸島の地図およびその群島の地理を調査研究し、東京で会議を開きその着手の方法を議論することを懇望する。着手の順序、殖民の手續を調べるために、まず探討船2隻を出し、パラワン島スルー島、ミンダナオ島に航行し、その土地の状況を調査する。その島の酋長と和親を結び、島民と親しくし、土地を借り、日本人をその地に殖民させる。日本人移民は、外国に出稼ぎしようとする者、貧困者、刑人などを移住させ、まず妻子ある者を先にする。日本人移住者には、日常生活の物品から各職業に必要な器具、およびいっさいの食糧を給し、かつ種子苗木等を与え穀物栽培させその新穀を食糧とし、塩は海水から作る。

南洋公会はその三島で重要な地に役所を置き、役員を派遣して、土地を割渡し、職業に従事することを指揮し、時々地方を巡回して取締をし、その地を殖民の第一区とする。殖民の第一区はカロリン群島マーシャル群島とする。殖民の第二区として、スペイン領ラドロン群島(マリアナ)は金銭にて譲与する説があるので、実地の調査により利益あれば譲与して着手する。殖民の第三区として、小笠原諸島東南のマゼラン群島アンソンズ群島とする。この群島は、ハワイ政府に属する島は十三島のみで、その他の島は統治するものがない島嶼で、調査をして殖民できる地があれば、出稼ぎあるいはハワイ島民をこの地に移して移民させる。このような殖民の三つの区の事業により、物産が増えれば、

小笠原諸島は二区と三区に入る物産の門となり、船舶の便を設け、小笠原は一大市場となる。また、沖縄の八重山宮古諸島は、第一区に入る物産の門となる。南洋公会は商売を誘導して、日本殖民に物産を開き、他国殖民との交易を行う。漸次このような計画が整うに従って、日本政府に対して南洋諸島にさらなる殖民地を求める。

南洋公会は最初に総五万円の資本金と定め、内二万円を南洋探訪船往復六箇月の費用に充て、残り三万円を諸般の準備のための資金とする。

(3) 硫黄島の探検とその領有

横尾東作の南洋公会設立大意での計画は、当時として突飛に類するものであったから、政府の保護を得ることができず、五万円の資金の捻出にも困難をきわめた。1886（明治19）年5月、一部の同志と図って帆船一隻を購入することができた。まず小笠原の東南に散在する無人島を探検する計画を立てたが、これも途中で船の故障が起き実現できなかった。

榎本武揚は通信大臣に就任すると、横尾の志を実現させるために通信省燈台局巡廻船の明治丸⁽⁶⁾を貸し出した。

横尾はこれを感激し、計画していた南洋の無人島探検を行うことになった。まず小笠原島を経て、当時無人の硫黄諸島を探検し、さらに南のグアム島方面にも航行したいと考えた。翌1887（明治20）年11月1日、横尾東作、東京府知事の高崎五六、および後に南洋で活躍した服部徹、鈴木経勲、依岡省三、松岡好一、玉置半右衛門ら、総勢40余名が乗船して、明治丸は横浜を出帆した。明治丸は、三宅島、八丈島を経て鳥島に着き、そこで玉置一行を下ろし、小笠原の父島、母島に到り、目ざす硫黄島に向った。硫黄島では、端船二隻を下ろして上陸した。さらに南北の硫黄島を探検する予定であったが、燃料の石炭の欠乏、航路不案内などの理由により両島への寄航ができなかった。明治丸は帰路につき、母島、父島に寄航したが、鳥島には悪天候の為寄ることができず、先に上陸した玉置一行をそのまま置き去りにしたままで、同年11月17日、17日間の渡航を終え横浜港に帰着した。

横尾は、この硫黄島探検の結果について以下のように記している⁽⁷⁾。
「予匆忙火出（硫黄島）を一周して其半腹の不地の平地に数十町歩の耕すべき

地を得たり、地味豊沃なれば数十戸の園図を作るべく又巨石の遠近に兀立して窪処に雨水あり、若し鑽を用ゆれば数斛の水を貯うべし、只家屋を構造すべき大樹なし、北島（北硫黄島）は峯鸞溪谷となく皆樹木ありて密茂し間々平原あり砂浜あり最も移住に適せり。」

横尾は、このように硫黄島が開拓移住に適しており、硫黄採掘が有望なることに着眼した。この探検は、民間有志の最初の大がかりな南洋探検であったので、当時世間で大きな話題となった。

明治丸のこの航行では、帰路に鳥島での激浪のため端船をつけることができなかつたため、玉置一行をそのまま置き去りにしてしまったが、玉置半右衛門はこれがかえって鳥島の開拓に成功し、かつアホウ鳥の羽採取により一躍巨額の財をなした。これ以来、横尾の探検に刺激されて硫黄島に渡航する日本人が相次いだ⁽⁸⁾。翌1888（明治21）年には、依岡省三が伯父伊太郎らと共に南洋丸で鳥島に渡り硫黄採掘を行なったり、その他の日本人の開拓住民も増えていった。このようなわけで、日本政府は1891（明治24）年9月勅令で、硫黄島三島を正式に日本領土として宣言し、東京府所管とした。硫黄島が日本領土となったのは、この横尾の探検がきっかけであったのである。

（4）横尾東作による『南洋群島独案内』の出版

横尾東作は、硫黄島探検の翌年、1888（明治21）年にイギリス人のH.J.フインドレーの北太平洋水路誌（1870年版）を翻訳して『南洋群島独案内』を著し、自費刊行し有志に頒った。これは、南洋群島の水路誌・地誌として明治時代で最初の本であった。

横尾が『南洋群島独案内』を刊行した目的は、その本の緒言に述べているので、以下に記してみよう⁽⁹⁾。

「客歳明治丸の火山島を探討して以来、豪胆の士数々遠征を企つるあり、若し此輩にして軍に海図に依り、或は海客の閑話を自得し、而て其地形の長短高低、港口の方位広狭浅深、上陸の險夷、薪水居民の有無、天気風潮の変動、水陸生産の種類多寡等、一々之を詳にせざる時は徒らに財を費するのみならず、予は其の其備（よう）を作るの責あり大に之を憂ふ因て倉卒筆を執り。

（中略）

刊行に付せり検討の志士、此書を一読せば多少裨益する所あらん、乎並に不幸にして群島の間に漂流する船頭舟乗なる者、或は断髮祈紳の惨を免かるるあらん乎これ予が婆心なり。」

以上のように、横尾東作が『南洋群島独案内』を翻訳、出版する目的は、日本人の南洋進出のための地理や情報を与えことであるとしている。

(5) 田口卯吉の南洋進出と南島商会、一屋商会、南洋貿易日置会社、南洋貿易株式会社

1890(明治23)年、土族授産金の処分金で南洋貿易を行うという田口卯吉(鼎軒)を中心とした南洋進出計画があった。田口卯吉は、明治を代表する思想家、『東京経済雑誌』を創刊したジャーナリストとして著名な人物である。この計画は、東京府が当時処分されるべき土族授産金約5万円の資金を使用して、田口卯吉、宇川盛三郎、関直彦、服部徹、依岡省三、上田毅門、服部新助、水谷新六等が参加する形で南洋貿易を行なおうとする計画であった。当初、横尾東作も事業経営の担当責任者として参加予定であったが、土族授産金の処分金の利益金の配分をめぐる意見対立から、横尾東作は服部徹、服部新助、水谷新六らと共に参加を辞退した。

その後、田口卯吉は、依岡省三、上田毅門、鈴木経勲、井上彦三郎らと「南島商会」を設立し、自ら頭取兼事務総裁となった。1890(明治23)年5月、横浜港を91噸の小型帆船「天祐丸」で出帆、小笠原を経てグアム、ヤップ、パラオ、ポナペなどの南洋群島に約半年にわたり巡航を企てた。南島商会は、ポナペに支店を設けて日本人最初の南洋商社として発足した。しかし、天祐丸の帰航後、南島商会は土族授産金の処置などから解散した。南島商会の天祐丸、支店等の財産は、長崎島原出身の小美田利義が設立した「一屋商会」が引き継いだ。その後、一屋商会も経営が悪化し、1893(明治26)年解散したが、それを引き継いだのが、南洋貿易日置会社であった。南洋貿易日置会社は、和歌山県日置村の資産家である三本六右衛門などが1万2千円の資本金を出資した合資会社で、一屋商会の社員であった佐本常吉や小川貞行などが運営に当たる南洋貿易商社であった。その後、南洋貿易日置会社は、1899(明治32)年に資本金を100万円に増資し、株式会社組織となった。さらに、1908(明治41)

年に、南洋貿易村山合名会社と合併し南洋貿易株式会社となった。なお、南洋貿易村山合名会社は、横浜の村山捨吉が、1901（明治34）年に南洋貿易を目的として設立した会社である。南洋貿易株式会社は、南洋群島を代表する貿易商社として発展した⁽¹⁰⁾。

（6）横尾東作による南洋貿易会社「恒信社」の設立

一方、横尾東作は、田口卯吉との南洋進出計画より脱退したが、有志と図って南洋貿易商社の設立を企てた。横尾東作は、榎本武揚の個人的援助を得て、服部新助、兒島喜三郎、野中萬助、富山駒吉、鳥山貞利、青地幾次郎、大村五左衛門、緒明菊三郎、靱山小半三郎、喜谷市郎右衛門らを発起人として、1890（明治23）年10月に株式会社恒信社を創設した。恒信社は、資本金一万二千元、横尾東作が自ら社長となり経営した。風帆船の「懷遠丸」（72噸）を購入した。

懷遠丸は、1890（明治23）年12月、横浜を出港し、サイパン、グアム、パラオ、トラック、ポナペに巡航し、翌年1891（明治24）年4年に横浜に帰着した。懷遠丸は、引き続き1891（明治24）年5月から1892（明治25）年5月に第二航、1892（明治25）年7月から11月に第三航、1892（明治25）年12月から翌年1893（明治26）年3月に第四航、1893（明治26）年4月から6月に第五航、1893（明治26）年7月から11月に第六航と就航した。この間、恒信社は、パラオのマラカル港に支店を設け、またヤップにも分店を設け、海參（干しナマコ）、コブラ、蝶貝（真珠貝）、鼈甲（べっこう）等の物産を南洋で仕入れ、日本に輸出するという貿易事業を行なった。

また、恒信社は、1892（明治25）年8月にはパラオ本島のフレシヤン村の面積3,700町歩の土地を大酋長より譲受け自社の土地とした。

（7）横尾東作の恒信社での事業経営

横尾東作の設立した恒信社の経営は、その後順調にはいかなかった。1893（明治26）年12月、株式会社恒信社は一旦解散して、横尾個人の匿名組合の商社である「横尾恒信社」として事業を継続した。横尾恒信社は、1894（明治27）年2月から4月に第七航、1894（明治27）年6月から11月に第八航、1894（明治27）年12月から1895（明治28）年2月に第九航の南洋航海を行った。1895

(明治28)年の第九航の後、懐遠丸を売却した。横尾恒信社は、翌1896(明治29)年、大喜丸を借りて就航したが、同船は同年1896(明治29)年5月パラオより帰航の途次、濃霧のため伊豆御藏島に衝突して船体が破損し、積荷およそ一万三千円分を流失した。同年10月、清徳丸を借入れて就航したが、同船も同年11月に太平洋で暴風に遭い九州種ヶ島に漂着、船体を破損した。

1897(明治30)年、横尾恒信社は機帆船の松阪丸(百九十噸)を購入し、同年1897(明治30)年5月から10月に第一航、同年12月から翌年1898(明治31)年5月に第二航、同年7月から翌年1899(明治32)年3月に第三航と数次就航した。しかし、依然経営は厳しく、横尾は松阪丸の購入に際し、自宅家屋を売却し、さらに、横尾は榎本武揚らと連名で八千余円に及ぶ負債を背負うという危機的状況となった。

横尾東作は、それまで数次の航海に自らは乗船せず、専ら嗣子の愛作が指揮していたが、1899(明治32)年6月からの第四航では、初めて横尾自ら松阪丸に乗船し南洋へ航行した。この航海で横尾は、グアム、オレアイ、パラオ、ソンソン、ヤップ等を巡航した。その後、横尾は南洋貿易の新たな計画を立てるなど事業経営に没頭し、1901(明治34)年中に松阪丸で第五航、第六航を行い、1902(明治35)年には村山商会(村山捨吉)と組んで武藏丸を送り、1903(明治36)年には松阪丸で第七航を行った。また、南洋群島のドイツ領時代に横尾恒信社は、バラオの商権を掌握した。しかし、横尾東作は、事業半ばで1903(明治36)年7月、65歳で急逝した。

横尾東作の歿後、1904(明治37)年恒信社は改組して「株式会社日本恒信社」となり、嗣子の横尾愛作によって引き続き経営された。その後、1917(大正6)年12月、恒信社は南洋貿易株式会社に吸収合併され、その長い歴史を閉じた。

2. 森小弁—南洋群島日本人移民の奇才

戦前の漫画のベストセラーであった「冒険ダン吉」のモデルではないかといわれた森小弁は、1891(明治24)年と最も早い時期に南洋群島のトラック諸島に渡り、現地人妻と結婚し、多くの子宝に恵まれ、75歳の生涯のほぼすべてを南洋の現地で暮らした。明治期日本の先駆的南洋移民としてユニークな日

本人移民であった⁽¹¹⁾。

(1) 森小弁の経歴

森小弁は、1869(明治2)年10月、三男五女の三男として土佐高知に生まれた。父は士族の出で可造といい、母はカナといった。森が8歳になった時、父は大坂裁判所の判事(勤解)に登用され、翌年は奈良の始審裁判所長となった。森は高知の海南学校に入学したが、父が病気で官を辞したため、1881(明治16)年に退学した。

森の兄が大阪在住の政治家大井憲太郎に師事していたこともあり、森も大阪に移り、大井憲太郎の書生となった。大井憲太郎らが投獄され、森も1886(明治19)年大阪事件に関連したとされ約1年投獄された。釈放後、森は、上京し大江卓の書生として玄開番となり、政治家を目指した。大江卓は、板垣退助と共に土佐高知で最も進歩的な政治家で、26歳で紳奈川県知事となり、1890(明治23)年国会開設と共に初代の予算委員長に選ばれた人物である。森は、1888(明治21)年、大江の紹介で通信大臣伯爵後藤象次郎のもとで寄食することとなった。後藤のところに移ってから、森は東京専門学校(現在の早稲田大学)にも学んだ(後に退学する)。森は、そこで、政治家の生活を見て、政治家の内面を知るに及んで、彼の理想とはあまりにもかけ離れたものであることを感じ、自ら後藤のところから飛び出してしまった。森は、生活とため按摩師となった。

1891(明治24)年、森は大江の紹介で小美田利義と出会った。小美田利義は、松平家の家老であった人で、当時、南島商会(明治23年に田口卯吉により設立された南洋貿易で最も古い会社)を引き受けて一屋商店と改名し、南洋貿易を始めた。森は、東京専門学校在学中、矢野文雄の「浮城物語」を読んで、南洋への憧れを強く抱き、海外雄飛を夢みていたこともあり、一屋商店の創立の話を聞くと、直ちに南洋渡航を申し出た。森の南洋への雄飛は、政治家として内地にいるよりは、外に出て南洋に王者をたろうという野心からであった。すなわち、森の望む所は、何れの点でも人の支配、政治であった、という⁽¹²⁾。

(2) 南洋への渡航とトラックでの貿易事業

1891(明治24)年12月、南洋貿易の一屋商店の所有船で、120噸の天佑丸は、船員7名および社員の森小弁と小川貞行の2名を乗せて、横浜港を出帆した。森は、刀1つとピストル1丁を携えていた。天佑丸は、年末小笠原の父島に寄港、漁師7名を雇い入れ乗船させ、鳥島沖では台風に見舞われ、飲料水を失うなど難航海であったが、1892(明治25)年2月に何とか南洋群島のポナペに着いた。ポナペでは一人が上陸し、残りの者はさらに西航し、トラック諸島(現在のミクロネシア連邦チューク州)の春島(現在のウェノ島)に入港した。その後、森以外の者はすべてトラックからポナペ島に移り、森は一人でこのトラックで新しい生活をする事となった。森は、ドイツ商人と島民とに伍して、一屋商店の社員として商売を開始することとなった。仕事の内容は、主に物々交換と貿易、すなわちコプラなどを現地で買い付け、対価として日本から輸入した雑貨品(マッチ、シャツ、ランプ等)などと交換した。そして、コプラは、主に日本に輸出された。

森は、トラックの春島に上陸した時、棲むべき家が無く、語るべき友もない、寂しい生活をしなければならなかった。このような孤独の生活は覚悟していたのできほど苦にならなかったが、島民によって絶えず脅かされる身の危険には生きた心地もしなかった。当時の島民は狂暴極りなく、日夜、他部落の敵と血生臭い闘争を繰り返していた。森は、その頃若く、血気も盛んで、南洋の王様になってやろうと野望もあったので、自ら現地人の戦いの中に入り、主導権をとっていた。日本人の森は、現地人の間で知れ渡った。このような状況であったので、店を開いても油断ならなかった。しかし、島民の気持ちが判ってくるにつれて、森は島に馴染んできた。一面粗暴野卑な島民は他面素朴そのものの自然人であり、都会人よりもずっと豊かな人間味を持っていることに気が付いた。森は、生活のレベルを島民にまで下げて、島民のものを食べ、現地語で話し、島民と交わって暮らすという生活を続けた。島民と語り楽しむ心のゆとりができてから、南洋を第二の故郷と感じるようになった。

森は、トラック諸島において懸命の努力で漸次商売の地盤を開拓していった。森は、コプラや椰子油を買い集めて商売を行っていた。当時島にはドイツの商人もいて、その勢力は強かった。島の原住民は、争い事が多かったため、ドイ

ツの銃器を手に入れたいためにドイツ商人の言いなりになっていた。日本の銃（村田銃）を輸入することで原住民が安く銃を購入できるようにすることで、日本人の勢力が断然頭角を現すこととなった。こうして森が島に来て商売をするようになってから少しずつ日本人の数が増えた。1895(明治28)年頃、トラックに在留する日本人4人（森小弁、田中鎮彦、白井孫平、赤山白三郎）は、日本人会と称する組織を作った。白井孫平は恒信社（恒信社は前述したように横尾東作により1890（明治23）年に設立され、後に南洋貿易会社に吸収合併された会社）社員、越後新潟の出身で、榎本武揚の玄関番であったが、戊辰戦争で函館の五稜郭に立てこもった榎本軍が官軍に降伏すると、日本を離れて小笠原を経てトラックに渡ったという変わった経歴の人物である⁽¹³⁾。赤山白三郎は宮城出身で、1896（明治29）年に、銃をめぐるトラブルから現地住民により殺されるという事件が起きた⁽¹⁴⁾。

1894（明治27）年、一屋商店が解散したため、その後、森は現地で独立してコブラ仲買人などの事業を行なった。1896（明治29）年5月、森は日本から持ち込んだ銃に火薬を詰めているところ火薬が爆発し右手首を損傷し、その右手切断と眼疾治療のため日本に一時帰国したが、全治後、1897（明治30）年再びトラックへ戻った。

（3）現地人酋長の娘との結婚と現地事業の発展

森小弁は、元来出稼人という意識ではなく、南洋に骨を埋めて子孫安住の地を作ろうという考えであった。日本人の同志二、三人と申し合わせ、島民の女を妻にすることとした。1898（明治31）年、森はトラックの春島（ウエノ島）のイラス村の酋長マヌピスの長女であるイサベラ（日本名を付して伊佐という）と結婚した。森は29歳、イサベラはわずか11歳で、早熟の島民としてもかなり早婚の方であった。イサベラは当時としては珍しいミッションスクールを卒業した才媛であった。森は、結婚を契機に、夏島（トノアス島）から妻の出身地であるトラックの春島（ウエノ島）イラメ村に居住し、南洋貿易日置合資会社（現在の南洋貿易株式会社）代理店として事業を行なった。

1898（明治31）年、トラック群島はスペイン領からドイツ領に代わった。1899（明治32）年1月、在留日本人9名は禁制品である銃器火および酒飲料を

島民に売ったとの疑いで退去を命じられたが、森一人のみ証拠不十分にて在留を許可された。

その後、森はトラックの木曜島（トール島）に転居した。1907（明治40）年、南洋貿易日置合資会社は村山商会と合併し、南洋貿易合資会社となり、トラックの春島（ウェノ島）ネクエ村に支店を設いた。1914（大正3）年日本海軍がトラック島を占領し、夏島を含む南洋群島は日本の委任統治領となった。森は、そのトラック群島での民政顧問となった。1915（大正4）年4月、南洋貿易株式会社が発立され、森は同会社トラック島支店付属仲買人となり、その後も昭和初期まで、南洋群島の貿易で活躍した。1916（大正5）年、森は戦役の功と現地での貢献により勲八等瑞宝章を授けられた。

おわりに

横尾東作と森小弁は、明治期の南洋群島での日本移民として大きな貢献をした。森小弁は、昭和20年まで存命であったので、明治、大正、昭和初期まで南洋の現地で活躍した。

横尾東作の南洋事業は、明治期、彼と関係のあった多くの人物に影響を与えた。横尾東作に関連ある南洋開拓の主要な人物として以下がいる。

水谷新六は、横尾と交流あり、1896（明治29）年天祐丸によって南鳥島を発見し開拓して、1898（明治31）年小笠原諸島の南鳥島が日本の領土となることに貢献した。松岡好一は、明治丸の硫黄島探検に横尾と同行し、その後オーストラリアの木曜島に渡り、自ら真珠貝採取者となり木曜島居留民団長となって、日本人移民の中心的人物として活躍した。松岡は、木曜島居留民の総代として、1894（明治27）年日本政府に対して、豪州日本領事館設置の請願書を出し⁽¹⁵⁾、タウンビルに設置が認められた。後に松岡は、ジャーナリストなどで活躍した。富山駒吉は、横尾が設立した恒信社創立の発起人の一人で、恒信社の帆船である懐遠丸の事務長でもあり、榎本武揚の意を受けてニューカレドニア日本人移民の実情を視察した。野中萬功は、恒信社の株主であるが、回漕業として著名で自ら野中南洋商会を興し、湊川丸で南洋群島のニューヘブリテス、ギルバート、サモア等を航行した。長谷部鐵之助は、同じく恒信社の株

主であるが、硫黄島の硫黄探掘を一手に掌握した。服部徹は、明治丸の硫黄島探検に横尾と同行し、明治20年代に『日本捕鯨彙考』、『小笠原島物産略誌』、『南洋策』、『日本之南洋』等、多くの南洋関連の著書を発表した。特に、『日本捕鯨彙考』と『南洋策』は、著名な本である。鈴木経動は、同じく明治丸の硫黄島探検に横尾と同行し、『南島巡航記』、『南洋探検実記』、『南洋風物志』等の著書により、南洋探検家として極めて著名な人物となった。

横尾東作は、「南洋公会設立大意」の思想、硫黄島の探検、「恒信社」の設立による南洋貿易事業などにより、南洋開拓で榎本武揚とともに多くの人物に影響を与えており、日本の南方発展史において大きな貢献をなした人物であると言えるであろう。

一方、日清戦争前の1891（明治24）年に南洋群島に移民した森小弁は、しっかりトラック群島の土に根付いて、明治、大正、昭和時代の長い間を、現地で生き抜いた。森はトラックで森商会を経営し、コプラの輸出、在留邦人向けに日用品や雑貨の販売などを行った。森は南洋開拓、南洋貿易、邦人会長などで長く活躍した。また、1931（昭和6）年頃までかなりの期間、木曜島（現在のツール島）の大酋長という原住民の代表を務めた。さらに、森は、島民教育にも尽力し、自費を投じて公学校を建設し島の子弟の教育を援助した。海軍南洋群島占領後の1936（昭和11）年、森の原稿と聞き取りに依拠した「トラック叢島風俗習慣取調概要」という史料がトラック軍政庁より出されており、南洋事情研究上の貴重な文献となっている⁽¹⁶⁾。これを読むと、森が現地語に堪能で、現地の風俗・文化を熟知していたかが理解できる。

1945（昭和20）年、森小弁は75歳で長い波乱の生涯を終えた。森は、渡航当時の心境を述懐した詩に「骨を埋む豈（あ）に旧墳墓を期せんや」と詠み、自分の骨を祖先と異にする墓に埋めるのも覚悟の上で、南洋開拓の先駆者として現地で生き抜く人生を最後まで貫いた⁽¹⁷⁾。森は、現地人の妻イサベラとの間に六男五女をもうけた。多くの子宝をつくったのは大きな収穫であった。その後、森の子孫は、直系だけで千人に達し、モリ・ファミリーとしてミクロネシア連邦で大きな勢力を持つようになった。モリ・ファミリーの中から、2007（平成19）年にミクロネシア連邦第7代大統領となったエマニュエル・モリを出している。

森小弁は、明治時代に南洋の土たる覚悟をもって渡航し、しかもこれを文字通り実行した稀有な日本人南洋移民の先駆者であったと言えるであろう。

(注)

- (1) 郷隆 (1942) 『南洋貿易五十年史』南洋貿易株式会社、3-4頁。
- (2) 郷隆 (1942) 『南洋貿易五十年史』南洋貿易株式会社、12-13頁。
- (3) 本稿でも、竹下源之介 (1943) 『横尾東作と南方先覚志士 (南洋資料258号)』南洋経済研究所、および河東田経清 (1917) 『横尾東作翁傳』河東田経清、に多くを負っている。
- (4) 竹下源之介 (1943) 『横尾東作と南方先覚志士 (南洋資料258号)』南洋経済研究所、4-5頁。
- (5) 竹下源之介 (1943) 『横尾東作と南方先覚志士 (南洋資料258号)』南洋経済研究所、7-8頁。
- (6) 明治丸は現在東京海洋大学に保存されており、重要文化財となっている。
- (7) 竹下源之介 (1943) 『横尾東作と南方先覚志士 (南洋資料258号)』南洋経済研究所、16頁。
- (8) 玉置半右衛門は、運賃として石炭料25円を収めて明治丸の便乗が許された。
なお、鳥島に探検、渡航した依岡省三については、岡志成 (1935) 『依岡省三』日沙商会、11-16頁に詳しい記述がある。
- (9) H.J.フインドレー (横尾東作訳) (1899) 『南洋群島独案内』稲田佐兵衛、緒言。
- (10) 南洋貿易株式会社は、現在も南洋での貿易事業を代表する会社として存続している。
- (11) 森子弁の伝記に関しては、戦前期のものとして、横田一二 (1947) 「南洋先駆の第一人者 森小弁翁」『南洋群島』第一卷第十、十一號、南洋経済研究所 (1944) 『内南洋を築きし人々—森子弁、赤山白三郎—』南洋経済研究所、が代表的なものである。
- (12) 南洋経済研究所 (1944) 『内南洋を築きし人々—森子弁、赤山白三郎—』南洋経済研究所、16頁。

- (13) 高知新聞社 (1998) 『夢は赤道に一南洋に雄飛した土佐の男の物語一』高知新聞社、130頁。
- (14) 赤山白三郎については、南洋経済研究所 (1944) 『内南洋を築きし人々一森子弁、赤山白三郎一』南洋経済研究所、24-29頁にその事件の詳細と人物評伝がある。
- (15) 豪州日本領事館設置の請願書は、外務省 (1894) 「濠洲クインスランド州日本領事館設立ノ請願書」外務省外交史料館 (レファレンスコード B15100825100) で公開されている。
- (16) 森子弁述 (1936) 『トラック叢島風俗習慣取調概要』トラック軍政庁 (「国立公文書館 アジア歴史資料センター」レファレンスコード C10128148200)。
- (17) 南洋経済研究所 (1944) 『内南洋を築きし人々一森子弁、赤山白三郎一』南洋経済研究所、20頁。

(参考文献)

- 外務省 (1894) 「濠洲クインスランド州日本領事館設立ノ請願書」外務省外交史料館 (レファレンスコード B15100825100)。
- 郷隆 (1942) 『南洋貿易五十年史』南洋貿易株式会社。
- 服部徹 (1888) 『日本捕鯨彙考』下田市水産会。
- 服部徹 (1888) 『小笠原物産略志』有隣堂。
- 服部徹 (1888) 『日本之南洋』南洋堂。
- 服部徹 (1891) 『南洋策』村岡源馬。
- H.J.フインドレー (横尾東作訳) (1888) 『南洋群島独案内』稲田佐兵衛。
- 平岡明利 (2015) 『アホウドリを追った日本人』岩波書店。
- 入江寅次 (1943) 『明治南進史稿』井田書店。
- 井上彦三郎・鈴木経勲 (1893) 『南島巡航記』経済報誌社。
- 高知新聞社 (1998) 『夢は赤道に一南洋に雄飛した土佐の男の物語一』高知新聞社。
- 河東田経清 (1917) 『横尾東作翁傳』河東田経清。
- 小林泉 (2010) 『もうひとつの戦後史 南の島の日本人』産経新聞出版。

- 森子弁述 (1936)『トラック叢島風俗習慣取調概要』トラック軍政庁(「国立公文書館 アジア歴史資料センター」レファレンスコード C10128148200)。
南洋経済研究所 (1944)『内南洋を築きし人々—森子弁、赤山白三郎—』南洋経済研究所。
- 南洋庁 (1938)『南洋群島要覧』南洋庁。
- 松永秀夫 (2000)「横尾東作—硫黄島を日本領土に—」『太平洋学会誌』第23巻第1／2号。
- 能仲文夫 (1935)『赤道を背にして』中央情報社。
- 岡成志 (1935)『依岡省三伝』日沙商会。
- 鈴木経勲 (1892)『南洋探検実記』博文館。
- 鈴木経勲 (1944)『南洋風物誌』日本講演協会。
- 将口泰浩 (2011)『「冒険ダン吉」になった男 森小弁』産経新聞出版。
- 田辺尚雄 (1968)『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』音楽之友社。
- 竹下源之介 (1943)『横尾東作と南方先覚志士 (南洋資料258号)』南洋経済研究所。
- 田畑道夫 (1933)『小笠原ゆかりの人々』文献出版。
- 田口卯吉 (1928)『田口卯吉全集 第4巻』田口卯吉全集刊行会。
- 田口卯吉 (1929)『日本経済論』改造社。
- 田口卯吉 (1929)『日本開化小史』改造社。
- 田口卯吉、井上彦三郎・鈴木経勲 (1892)『南嶋巡航記』経済新聞社。
- 山田毅一 (1916)『南進策と小笠原諸島』放天義塾出版部。